

乙巳の変と『万葉集』1二〇四

“Isshi-No-Hen” and Poem No.3~4 of Manyoshu Vol.1

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健

●はじめに

前稿「天の香具山の国見」(中村学園大学流通科学研究 14-2, 2014)において、蘇我入鹿は、蘇我氏内部にも強い反発があるのにもかかわらず、推古天皇の後継者として田村王(舒明天皇)を選んだという話をしました。入鹿が田村王を選んだ理由の一つとして、蘇我氏は親百済の立場を取っていたのに対して山背大兄王は親新羅の立場を取っていたことを述べましたが、実は、入鹿には田村王を選んだもう一つの大きな理由がありました。この理由を説明するためには、推古天皇が崩御した推古三十六年(六二八)から十七年後の皇極五年(六四五)に飛鳥板蓋宮で起こったクーデターの話をしなくてはなりません。飛鳥板蓋宮は、舒明天皇の後であった皇極天皇の宮で、舒明天皇の宮であった飛鳥岡本宮(飛鳥板蓋宮伝承地の最下層遺跡)の跡地に建てられています。

では、入鹿が舒明天皇を選んだこと板蓋宮で起こったクーデターとはどのように関わったのでしょうか。また、『万葉集』巻一の語る「歴史」において、このクーデターはどのように扱われているのでしょうか。この問題については、『万葉集』巻一の冒頭に載せられる三々四番歌との関連から考察してみたいと思います。併せて、三々四番歌の作者と記載されている「中皇命」が誰かに ついても、言及したいと思います。

●乙巳の変

まず、はじめに飛鳥板蓋宮で起こったクーデターの経緯について、『日本書紀』の記述を通してまとめておこうと思います。

皇極五年六月十二日、この日は大雨が降っていました。この日、飛鳥板蓋宮では三韓の調進貢の儀式が行われていました。三韓とは高句麗・百済・新羅のことです。飛鳥板蓋宮の大極殿には皇極天皇が出御し、その側らには舒明天皇の皇子である古人大兄皇子が侍していました。大極殿の前の朝廷には、蘇我入鹿・蘇我石川麻呂(蘇我蝦夷の弟倉麻呂の子。入鹿の従兄弟)と高句麗・百済・新羅の使者が控えていました。

まず、石川麻呂が前に進み出て、三韓の上表文を読みあげました。上表文を読みあげていた石川麻呂の様子は明らかに異常でした。全身が汗まみれになり、声が乱れ、手が震えていました。不審に思った入鹿が石川麻呂に、「何故か掉ひ戦く」と尋ねると、石川麻呂は「天皇に近づける恐みに、不覚にして汗流る」と答えています。この時、大極殿の側らには、中大兄皇子が槍を持ち、中臣鎌子(後の藤原鎌足)が弓を持ち、佐伯子麻呂と葛城稚犬養綱田が剣を持って潜んでいました。入鹿暗殺のためです。事前の打ち合わせでは、石川麻呂の上表文奏上を合図として、子麻呂と綱田が入鹿に斬りかかることになっていました。ところが、子麻呂と綱田は恐怖の余り動くことが出来ず、石川麻呂は動揺を隠し

きれず、入鹿の不審を買ったのです。

入鹿と石川麻呂の様子を見て、中大兄皇子は自らが手を下すしかないという叫び声を上げて殿側から躍り出ました。皇子の後に続いた子麻呂は、入鹿の頭と肩に斬りつけました。驚いた入鹿が起き上がったところ、子麻呂はさらに入鹿の片足を斬りました。『日本書紀』によると、入鹿は暗殺を警戒していて、常に剣を身から離さなかったのですが、三韓調の儀式に出席するために入朝する入鹿に対して、鎌子は俳優を使って剣を手放させることに成功していました。また、中大兄皇子は、外部からの兵が入鹿救出に駆けつけないように、衛門府に命じて十二の宮門を全て閉じさせていました。子麻呂に斬りつけられた入鹿は、「当に嗣位に居すべきは、天子なり。臣罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」と叫びました。これに驚いた天皇が「知らず、作る所、何事有りつるや」と中大兄皇子に尋ねたのに対して、皇子は「鞍作、太宗を尽し滅して、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代へむや」と答えました。この答えを聞いて、天皇は入鹿を見捨てて、殿中へと退いたのでした。子麻呂と網田は入鹿を斬り殺し、入鹿の死体は天の中の庭に投げ出され、席障子で覆いをかけられたといいます。

入鹿暗殺を目前で見た古人大兄皇子は、私邸へと逃げ帰り、「韓人、鞍作臣を殺しつ。吾が心痛し」と言って、門を閉じて引き籠もりました。中大兄皇子は法興寺（飛鳥寺）に立て籠もり、蘇我氏の反撃に備えました。蘇我氏に従っていた今来漢人の子孫である漢氏一族は、軍備を整えて、甘樫丘の蘇我蝦夷・入鹿邸に集結しようとしていました。このクーデターの一年前の皇極四年（六四四）、蘇我蝦夷・入鹿父子は甘樫丘に、「上の宮門」「谷の宮門」という大邸宅を築き、これを要塞化していました。中大兄皇子は、將軍巨勢徳陀を派遣して、漢氏の軍勢を解散させることに成功します。六月十三日、自らの不利を覚った蝦夷は上の宮門・

谷の宮門に火を付け、自殺します。これによって、蘇我本宗家は滅亡します。中大兄皇子・中臣鎌子・蘇我石川麻呂によって行われた、入鹿暗殺に始まるクーデターは乙巳の変と呼ばれています（乙巳の変は、昔大化の改新と呼ばれていました）。

●乙巳の変の目的

乙巳の変の経緯を見ていくと、一人よく分からない行動を取っている人物がいます。古人大兄皇子です。なぜ古人大兄皇子が入鹿暗殺に大きなショックを受けたのでしょうか。古人大兄皇子について見ていくと、乙巳の変というクーデターの起こされた目的が見えてくるように思われます。

前稿で話したように、舒明天皇は蘇我氏と血縁のない天皇でした。舒明天皇の父は敏達天皇の皇子である押坂彦人大兄皇子です。押坂彦人大兄皇子の母は息長真手王の娘の広姫です。押坂彦人大兄皇子は、継体天皇を支えたことで力を得た近江の息長系王族の流れを引く皇子でした。血縁のない舒明天皇を蘇我入鹿が選んだ理由として、山背大兄皇子が親新羅の立場であることを指摘しましたが、もう一つの理由として古人大兄皇子の存在を指摘しておきたいと思えます。

舒明天皇には、宝女王（舒明天皇が崩御した後、宝女王が皇極天皇として即位しました）と法堤郎媛という二人の妃がいました。宝女王は押坂彦人大兄皇子の子である茅渟王の第一王女です。蘇我氏との血縁はありません。法堤郎媛は入鹿の父である蘇我蝦夷の妹です。入鹿にとって叔母に当ります。宝女王には、中大兄皇子・間人皇女・大海人皇子の三人の皇子女がいました。法堤郎媛には古人大兄皇子の一人の皇子がいました。蘇我蝦夷が血縁のない舒明天皇を選んだのは、舒明天皇が退位した後、蘇我氏との血縁を持つ古人大兄皇子の即位を期待していたからです。舒明天皇即位の段階において、次の天皇の候補の主流は古人大兄皇子にあ

り、中大兄皇子は傍流でしかありませんでした。

古人大兄皇子が即位した場合を考えると、中大兄皇子の立場は微妙になります。中大兄皇子は古人大兄皇子の立場を脅かす存在であり、そのまま放置しておけば古人大兄皇子を支えていた蝦夷・入鹿に対する反対勢力の中核となる可能性を持っています。蝦夷・入鹿父子がこのようなりスクを見逃すはずがなく、中大兄皇子は間違いなく蝦夷・入鹿によって殺されることになるでしょう。

中大兄皇子は不利な状況に追い込まれる前に先手を打ちました。先に蝦夷・入鹿父子を討てば、古人大兄皇子の即位はなくなり、自らの生命を守ることができま。乙巳の変の目的は、『日本書紀』では蘇我氏の専横の阻止にあると説明されていますが、当時の人間関係を見ていくと、真の目的は中大兄皇子による古人大兄皇子の追い落としにあったことが分かります。乙巳の変の後、古人大兄皇子は出家して吉野に隠棲しましたが、中大兄皇子はこれを見逃しませんでした。事変の三ヶ月後の九月十二日、吉備垂笠という者による「古人大兄皇子が謀反を企てている」という密告を受けて、古人大兄皇子は中大兄皇子の軍勢によって攻め滅ぼされました。今の私たちから見ると、舒明天皇と皇極天皇との間に生まれた中大兄皇子が即位するのはさほど難しくないように感じられます。しかし、それは中大兄皇子が天智天皇として即位することを知っていることによる結果論です。実際は、中大兄皇子はクーデターを起こすことによって、王権を篡奪したのです。（注1）

『日本書紀』を含む後世の歴史書は中大兄皇子の篡奪を隠そうとします。後の天皇たちにとって、自分たちの先祖が篡奪という不当な手段によって王権を奪取したという事実は都合が悪いものだからです。『万葉集』を歴史書として読むと、同じ操作がなされていることが分かります。『万葉集』では皇極・斉明天皇（皇

極天皇が重祚したのが斉明天皇です）を中心とする後宮の女性たちの和歌が多く載せられています。皇極・斉明天皇の後宮の繁栄を記すことよって、舒明天皇の正統な妃が皇極・斉明天皇であることを主張しています。そのことよって、皇極・斉明天皇の皇子である中大兄皇子・大海人皇子は、舒明天皇の正統な後継者だということを主張しているのです。このような『万葉集』の立場を典型的に示している歌が、次に記す中皇命の歌（133〜134）なのです。

●遊獵の歌

明日香から南西に紀の国へと続く道が延びています。巨勢道です。巨勢道は巨勢山付近で吉野へと行く道と分かれ、西へと進みます。重坂峠を越えると、そこに宇智野が広がっています。正確な年代は不明ですが、舒明天皇が即位してから数年後の夏五月五日、天皇は宇智野に赴き、薬狩を行いました。万葉集三・四番歌は、この薬狩においてうたわれました。

天皇、宇智の野に遊獵したまふ時、中皇命の間人連老をして献らしめたまふ歌

やすみしし わご大君の 朝には とり撫でたまひ 夕には
い倚り立たしし 御執らしの 梓の弓の 中弭の 音すなり
朝獵に 今立たすらし 暮獵に 今立たすらし 御執らしの
梓の弓の 中弭の 音すなり（133）

反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野
（134）

「薬狩」とは、薬草や鹿の袋角（生えたばかりの柔らかい角。漢方薬となります）を取ることを目的として行われる宮廷行事で

す。葉狩は、梁の宋懐（四九八～五〇二）の記した年中行事書『荆楚歳時記』に五月の行事として記されているところから、中国伝来の行事であったことが分かります。『日本書紀』では、推古十九年（六一一）五月五日に行われたのが最古の記録です。十九年の葉狩の様子は、『日本書紀』に次のように記されています。

十九年の夏五月の五日に、菟田野に葉狩す。鷄鳴時を取りて、藤原池の上に集ふ。会明を以て乃ち往く。粟田細目臣を前の部領とす。額田部比羅夫連を後の部領とす。是の日に、諸臣の服の色、皆冠の色に陪ふ。各髻花着せり。則ち大徳・小徳は並に金を用ゐる。大仁・小仁は豹の尾を用ゐる。大札より以下は鳥の尾を用ゐる。

狩に参加した諸臣たちは、推古十一年（六〇四）に定められた冠位十二階に基づいた、さまざまな色の服で参加しました。身分によって服の色を変えるのは中国の制度の模倣です。推古朝以前、身分による服制は日本にありませんでした。参加した諸臣の服からも、葉狩が中国から輸入され、宮廷行事として定着したことが分かります。ところで、三番歌の題詞には遊獵とはありますが、葉狩とは記されていません。遊獵とは「遠くに出かけて行われる狩」のことです。「遊」とは、「遠くに出かけること」を表わす漢字です。では、この遊獵がなぜ葉狩であると分かるかというところ、四番歌に「草深野」とあるからです。「草深野」とは草が生い茂った状態を表わしますが、これは夏の風景です。通常の狩りは冬に行われます。夏に行われる狩は葉狩です。

三番歌は、大王が「朝には とり撫でたまひ 夕には い倚り 立たしし 御執らしの 梓の弓」の「中弭」の音が聞こえるとうたわれています。「中弭」とは何かは不明ですが、吉村誠（注2）は、「中弭」を中仕掛けと考え、矢が発射されるときに中仕掛け

が鞆に当たって発する音が「中弭の音」であると述べています。三番歌でうたわれているのは、宇智野の狩場で獲物に対して弓を発射する天皇の勇姿です。

ただし、この点については異論もあります。私の解釈には通説と異なる点もありますので、ここで三番歌の解釈について述べておこうと思います。三番歌には二つの有力な解釈があります。一つは狩場への出立に際して鳴弦の儀礼を行う大王の姿を見ようとすめるものです。江戸初期の国学者契沖の注釈書『万葉代匠記』の精選本に、

哥ノ心ハ、我君ノ朝ニハナテ甞ヒ、夕ニハヨセ立タマヘル弓ノ弭ノ声聞ユルニテ、朝夕ノ獵に出給ヲ知ト也。

とあるように、「立たす」の伝統的な解釈は「出立」です。真淵は、三番歌でうたわれているのは、天皇が「狩場へと出立なさるる姿であると解釈しています。ただし、出立に際して鳴らされる「奈加弭の音」とは何かという問題は、「奈加弭」の实体が不明であることとあわせて、定まることはありませんでした。それに対して、窪田空穂は『万葉集評釈』の中で「奈加弭の音」とは獵の幸を妨げる悪霊を追うための鳴弦の音であるという見方を示し、以後この解釈は広く支持されています。

もう一つは、狩場に立って獲物へと弓を射る大王の姿がうたわれていると考える解釈です。この解釈を取る場合、「立たす」とは「狩場にお立ちになつてゐる」となります。つまり、天皇は狩場に到着し、狩りをしている姿がうたわれているとする解釈です。ここでの「奈加弭の音」は、狩獵の風景がうたわれていることなので、弓の発射音であるということになります。吉永登（注3）は、万葉集中の「狩に立つ」の例（1・四九、3・二三

九、6・九二六、6・一〇〇一、19・四二五七）は、

日並皇子の命の馬並めて御獵立たしし時は来向かふ（1四九）

に代表されるように、いずれも「狩場に立つ」の意味で理解できるとして「出立」説に疑問を提示しました。また、私（注4）も、「今：らし」の構文から、「狩場に立つ」に与する立場を表明したことがあります。「今：らし」の構文は、

君が舟今漕ぎ来らし 天の川霧立ち渡る この川の瀬に（10二〇四五）

とありますように、今起こっていることの原因を推定するもので、今起こっていることから、これから起きることの推測をするものではありません。通説は、「鳴弦の音が聞こえた」↓「これから狩りに出発するらしい」というように、未来に起こることを推測しているという解釈を取りますが、「らし」の用法から見ても、この通説の解釈は成立しないように思われます。「今：らし」の使い方から考えると、三番歌は「鳴弦の音が聞こえる」↓「今狩をしているらしい」というように解釈すべきなのです。以上から、通説とは異なる解釈ですが、「立たす」を「狩場にお立ちになつている」、「奈加弭の音」は弓の発射音であると私は考えたいと思っています。三番歌は、狩場で弓を射る大王の勇姿がうたわれているのです。

福 沢 健
ついでに四番歌について述べておきますと、「馬並めて朝踏ます」とは、馬を並べて野を進み、獲物たちを追い出している様子です。古代の狩獵は、獲物を追い立てる勢子、逃げてくる獲物を弓で射る射手によって行われました。四番歌は、馬を並べて勢子を務める諸臣の様子が、三番歌は射手として獲物を射る天皇の様

子がそれぞれうたわれています。四番歌は、三番歌と同時にうたわれたのではないという意見（注5）もあります。四番歌でうたわれている風景とよく合致するのは、狩場で弓を射る大王の姿でしょう。

従来から、三番歌は、『古事記』雄略天皇条に載せられる、

やすみしし 我が大君の 朝とには い倚り立たし 夕とには
はい倚り立たす 脇机が 下の 板にもが あせを（記一〇四、志都歌）

という歌と類似していることが指摘されてきました。記一〇四歌は、春日の袁杼比売（「大王の歌」で紹介した女性です。道で雄略天皇に声を掛けられて、逃げた女性です）が天皇に盃を捧げたときにうたった歌で、いつも大王の側らにある脇机に対する羨望を述べて、せめてその下板ぐらいにはなりたいたいとうたうものです。上野理（注6）によれば、袁杼比売が後宮の女性の代表として、大王に対する憧れをうたったのが記一〇四歌です。そして、上野は、同様の詞章を持つ三番歌も中皇命が後宮の女性の代表として大王（舒明天皇）に対する憧れをうたったのだ、と解釈しています。上野の解くように、三番歌は、いつも大王の側らにある梓の弓に対する羨望を述べて、弓と同じようにいつも大王の側らにありたいとうたう歌なのです。弓に対する羨望は、中皇命の気持ちであると共に、後宮で天皇に仕える女性全ての気持ちです。中皇命は、後宮の代表者として、天皇への恋歌を献上したのでした（注7）。

●中皇命

では、舒明天皇の後宮の女性を代表する中皇命とは誰なのでしょう。中皇命について、江戸時代中期の国学者賀茂真淵（一六九

七(一七六九)は、『万葉考』別記で、題詞に「間人老」の名があることに注目して、中大兄皇子の妹である間人皇女であるとしています。これに対して、喜田貞吉(注8)は、ナカツスメラミコトとは中継ぎの天皇の意であるとして、舒明天皇の後を継いで天皇になった宝女王であるとなりました。

現在は間人皇女説が通説のようになっていますが、私は宝女王説に注目したいと思っています。間人皇女説には、いくつか問題点があります。まず、間人皇女がナカツスメラミコトと呼ばれる理由が明確ではありません。また、後宮の女性を代表するのには、間人皇女は幼すぎるように思われます。舒明天皇が崩御した舒明十三年(六四一)、間人皇女の兄である中大兄皇子は十六歳でした。間人皇女の生年は不明ですが、舒明十三年の段階で十四歳程度であったと推測されています。舒明天皇の葉狩は天皇がもつと若い頃に行われたと考えれば、三番歌は十歳前後の幼女によってうたわれたこととなります。間人皇女説を取る論者は、三番歌は間人老によって代作されたと説明することによって、年齢の問題をクリアしようとしています。ですが、どうでしょうか。また、弓に対する羨望をうたう歌の内容も、幼女によって奉られる歌としては不適切なように感じられます。

中皇命を宝女王であると考え、三番歌・四番歌が、巻一の冒頭近くに載せられている意味が明確になるように思われます。三番歌・四番歌を載せることによって、万葉集は舒明天皇の後宮の中心は宝女王であると主張しているのです。そして、宝女王が後宮の中心であると主張することによって、女王の長子である中大兄皇子の正当性を主張しているのです。

●まとめ

舒明天皇の本来の正当な後継者と目されていたのは、古人大兄皇子でした。実際の歴史においては、舒明天皇の後宮の中心にい

たのは、蘇我蝦夷の妹であった法堤郎媛であったはずですが、『万葉集』は、宝皇女が後宮の代表として天皇への思慕をうたう三番歌・四番歌を載せることによって、舒明天皇の後宮の中心人物は宝女王であるということを主張しているのです。『万葉集』が三番歌・四番歌を載せたのは、宝女王から生まれた中大兄皇子・大海人皇子へと続く皇統が正当であるという「歴史」を語るためであったと考えられます。乙巳の変に関連させて言えば、『万葉集』巻一は中大兄皇子のクーデターは正当な皇位継承者である中大兄皇子によって行われたものであるという「歴史」を主張するものであったのです。

注1 吉川真司『飛鳥の都』岩波新書、二〇一一は、乙巳の変によって、権力中枢は(皇極天皇一古人大兄皇子一大臣蘇我蝦夷・入鹿)から(孝徳天皇一中大兄皇子一左右大臣・中臣)へと転変したと述べています。乙巳の変のリーダーとして、孝徳天皇の存在は抜きに考えられませんが、『万葉集』の語る「歴史」においては孝徳天皇の存在は軽く扱われています。

注2 吉村誠『万葉集』三番歌「中弭の音」考、「日本文学論究」四八、一九八五。

注3 吉永登「今立たすらし」、『万葉 通説を疑う』創元社、一九六九。

注4 福沢健「遊獵の歌」、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要「三四、二〇〇五」。

注5 神野志隆光「歌の「共有」―初期万葉から人麻呂歌集へ―」、『柿本人麻呂研究』塙書房、一九九二。

注6 上野理「中皇命と遊宴の歌」、『人麻呂の作家活動』汲古書院、二〇〇〇。

注7 上野前掲論文6は、女性の代表者が男性の代表者にうたいかけるといふ、初期万葉に特徴的に現れるあり方を「歌の共有」と呼んでいます。

注8 喜田貞吉「中天皇考」、『万葉学論纂』明治書院、一九三一。